

令和3年度 第2回富良野市総合教育会議 会議録

開催年月日	令和3年12月20日(月) 開会：午後1時27分 閉会：午後2時43分
開催場所	富良野市役所 第3会議室
出席者	市長 北 猛 俊 教育長 近 内 栄 一 教育委員 宮 本 鎮 栄 教育委員 津 山 正 樹 教育委員 菅 野 義 則 教育委員 渡 邊 啓 子
欠席者	なし
事務局等出席者	富良野市教育委員会 教育部長 亀 淵 雅 彦 学校教育課長 佐 藤 清 理 学校教育課主幹 松 原 光 利 学校教育課管理係長 石 坂 征 和 富良野市 副市長 石 井 隆 総務部長 稲 葉 武 則 企画振興課長 関 沢 博 行
議 題	1) 市内の高校教育環境について 2) その他
傍 聴 人	なし
報 道 機 関	なし

議事の経過

開会 午後1時27分

亀淵教育部長

ただ今より令和3年度第2回富良野市総合教育会議を開会いたします。本会議は、市長と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、本市教育の課題及びめざす姿等を共有しながら、同じ方向性のもと連携して効果的に教育行政を推進していくことを目的としております。富良野市総合教育会議設置要綱に基づき、議事録は公開することとなっております。

開会にあたりまして北市長よりご挨拶をお願いいたします。

北市長

改めましてみなさんこんにちは。第2回の富良野市総合教育会議ということで、まずは教育委員の皆さまにご出席いただきましてありがとうございます。また、平素から富良野市の子どもたちの教育環境の整備や学校運営など様々な場面でご尽力、ご協力いただいておりますことに重ねてお礼申し上げます。

過日、樹海小・中学校の開校式が執り行われましたが、少子化が続く中では学校

の再編というのは避けて通れないことだと思っています。また、この後も学校の再編に向けた協議が行われるものと思っていますし、ご協力のほどよろしく願いいたします。樹海小・中学校の閉校につきましては、委員の皆さんのご尽力により、また、知識の結集により、閉校ということは一部寂しい部分もありますが、未来に向けた新たな取り組み、もっと言うと新たな挑戦ということと思っています。そうしたものを生み出していただいたことも感謝申し上げたいと思います。今日の総合教育会議につきましては、市内の高校教育環境についてということで、ご協議を頂きたいと思います。行政と教育委員会との情報共有という場ですので、決して答えの出るものではありませんが、あるべき姿に向かって進んでいく第一歩になればと思っています。忌憚のないご意見を頂きますようお願い申し上げます。開会のご挨拶とします。よろしくお願いいたします。

亀淵教育部長

ありがとうございました。続きまして、近内教育長よりご挨拶をお願いいたします。

近内教育長

みなさまこんにちは、令和3年度第2回目の総合教育会議開催にあたりまして、一言ご挨拶させていただきます。北市長におかれましては、本市の子育て支援そして教育の環境づくりにご理解、ご尽力いただきますことにこの場をお借りしてお礼申し上げます。今日のテーマであります高校教育について、人口減少・少子高齢化の社会の中で、世の中ではSDGs持続可能な社会づくりと言われておりますが、本市においても持続可能なまちづくりを進めて行くためには、人づくり、教育が重要であると考えています。特に高校については、教育活動の中で様々な地域の人たちと関わりを持ちながら将来の進路を見定めることが重要であると考えています。市内の中卒者の市内進学率が65%で、3割以上が旭川、札幌、市外の方に進んでいます。そういった状況を放置するのではなく、地元に進学をしてもらい将来に向けての夢、希望が実現できるような高校の魅力づくりが重要と考えています。子どもたちの今の教育ニーズは、非常に多岐にわたっており、単なる進学だけではなく、芸術・文化などいろいろな分野で活躍したいという子どもたちもいます。それぞれの教育ニーズに向けて、いろいろな教育環境づくりが求められています。高校については、道教委の所管ではありますが行政と地域が連携して、道教委の教育施策を動かしていけるような、地域の魅力ある高校になっていく取り組みとして、ご協議をお願いしたいと考えています。いずれにしましても子育てするなら富良野、そして教育するなら富良野ということで、魅力ある地域づくりに繋がっていただけるようお願い申し上げます。よろしくお願いいたします。

亀淵教育部長

ありがとうございました。これから意見交換に入りますが、これからは北市長の進行で進めて参りますのでよろしくお願いいたします。

北市長

それでは、進行役を務めさせていただきますが、ご協力をお願いします。

亀淵教育部長

議題の1点目「市内の高校教育環境について」でございますが、昨年の11月に北海道知事、併せて北海道教育委員会教育長に将来の富良野市内の公立高等学校の在り方に関する要望書を近内教育長と一緒に提出しました。その後、より具体的な学校規模及び学科編成について、現在協議をしています富良野市内高校教育在り方検討会議におきまして、具体的な内容が議論されまして意見が出されました。その内容につきまして、意見交換したいと思いますが、内容につきまして、事務局より説明をお願いします。

資料1及び別紙に基づいて、説明させていただきます。

経過につきまして、令和元年7月から令和2年2月にかけて、経済界・教育関係者・有識者・市内高校の校長、道教委をオブザーバーとして、富良野市内高等学校の在り方検討会議を組織し、今後の生徒数の減少を踏まえ、市内高校の配置及び教育環境についての議論を行い、令和7年度を目処に市内2つの高等学校を再編し、新しい高等学校を設置する必要があるという結論となり、令和2年3月に教育委員会へ意見書が提出されました。その後令和2年6月にこの総合教育会議にて要望書を提出することを確認し、その後富良野沿線の教育長で組織する富良野地区広域教育圏振興協議会、首長で組織する富良野圏域連携協議会にて合意形成されました。それを踏まえ、令和2年11月に一定規模の生徒と教職員を維持し、活力ある教育活動を展開するために「将来の富良野市内公立高等学校の在り方に関する要望書」を北海道知事及び北海道教育委員会教育長へ提出しました。令和3年4月下旬に北海道から示された公立高等学校配置計画におきまして、上川南部の高校配置計画の見込みでは令和7年度以降について、令和7年度99人、令和8年度108人の減少が見込まれることから、旭川市内における定員調整の検討が必要であり、富良野市における検討結果を踏まえた高校配置の検討が必要と明記されました。本年8月から11月にかけて、先の「富良野市内高等学校の在り方検討会議」を「富良野市内高等学校教育の在り方検討会議」と改称し、具体的な学校規模と学科編成について、中卒者の進路動向及び生徒・保護者の教育ニーズ等も考慮した中で望ましい新設校の在り方について議論し、別紙の意見書が11月30日に教育委員会に提出されました。

意見書の内容につきましては、大きく背景、検討経過、再編後の学科構成や職員の配置、大学や地域産業界などとの連携体制の構築、使用する校舎等及び施設整備の項目に分かれています。背景としましては、前段でもお話ししましたが急速な少子化が進み、市内中学校卒業生が本年度3月には163人、更に令和7年度3月には137人まで減少することが予想されています。そのような中、令和3年4月市内高校の定員充足数は富良野高校80%、緑峰高校は46.7%の状況で、各校共に一定の生徒数及び教職員数を維持し、活力ある教育活動を展開することが難しくなります。

経過につきまして、市内高等学校教育の在り方検討会におきまして、6回の協議を行いました。1回目は高校は高校生のためであることを確認し、2回目は高校生に求められる資質能力について議論をし、3回目は高校に求められる教育活動に

ついて議論をし、4回目は具体的に想定する規模・学科について議論をし、5回目は教育ニーズに基づく学科構成について議論を踏まえ、最終11月12日に意見書を確認し取りまとめました。

再編後の学科構成や職員の配置につきましては、進学優先クラスを含めた普通科を1学年3学級、これにつきましては先日の社会教育課主催のこども未来づくりフォーラムにて、扇山小学校の児童が教育という部分で、富良野高校に東大に進学できる特進クラスがほしいという提言がありました。そして、デジタル・ITを学ぶことができる職業科を1学級、地域産業を学ぶことができる職業科1学級、合計5学級とすることを確認しました。また、学科編成の検討にあたっては、教育加算等を有効に活用し、教職員数が最大となることも配慮しました。

大学や地域産業界などとの連携体制の構築につきましては、コンソーシアムを作りながら魅力ある学校づくりを行っていくこと。

使用する校舎等及び施設整備につきましては、建設年次が比較的新しく、実習施設が整っている緑峰高校に集約すること。そして、令和7年度から両校の在校生が新設校で学べるよう配慮することという意見が出されました。

今後につきましては、本日の総合教育会議での議論を経て、富良野圏都市町村との連携を図り、北海道そして北海道教育委員会へ改めて上記意見書を踏まえた要望書を提出して行きたいと考えています。

別紙につきましては、それぞれの内容がより具体的に書かれていますので、ご一読願いたいと思います。以上です。

北市長

市内の高校教育環境についてということで、今までの議論経過、再編後の学科構成について説明頂きました。環境整備に関する意見書については、あらかじめご配布してありますので、説明は省略しましたが、この件につきましてご質問、ご意見はありませんか。

宮本委員

只今の説明と意見書の内容を確認しまして、自分も多少関わってきましたので、感想は、再編統合のために動いてきたのは、減少するから再編統合するということもありますが、20年、30年先の日本の社会や富良野を見据えた論議がされてきました。その中で多様なニーズに答える高校教育をめざすには、基本的には進学できる学校、論議の中では、扇山小学校では東大をめざせる学校とっていましたが、大人も新しく再編統合される学校は、東大あるいは医学・進学課程を真剣にめざせる学校づくりを行うことを厚い思いで論議しました。あとは道教委がどう理解して、条件に沿った動きをしてもらえるか、それを受ける学校や先生方が地域の厚い思いを具現化していくかが問われると思います。意見書はかなり良いと思います。

北市長

その他ご意見ございますか。

菅野委員

相対的に2校を1校にまとめて行くことに異論はないです。1つ地域産業を学ぶことができる職業科について地域産業では、富良野は農業が盛んですし、いまま

でも農業科がありますが、そのまま行うのか、将来的には自分も農業なので北海道の農業は原料生産地帯というとならえで、もっと加工や作物などをアレンジしていくようにできれば、まちづくりにも職業選択の幅が広がるので行っていただきたい。そういったことが学べる職業科にしてもらいたい。教育長が言っていた持続可能な産業として農業があってほしいし、学びも取り入れた地域産業を学ぶことの確立を望んでいます。

北市長

今の意見について、検討会議では意見等はありませんでしたか。

亀淵教育部長

意見書にもそのことが明記されており、本市の基幹産業が農業と観光であるため、経営・マーケティング、国際化など特に農業におきましては、食物を育てるだけではなく、栽培、加工、販売する一連を学べる部分、スマート農業のデジタル化の技術も必要となり、観光学科につきましては、観光そのものではなく持続可能な環境教育などいろいろなものを選択できる学科編成にしていくことが重要であるとの意見でした。商業科では緑峰高校に総合ビジネス科がありますが、今後一般事務という職業は減っていくことが予想されます。それだけではない ICT 技術を使ったものが必要になってくると思います。そういったものが選択科目として学べるような編成を検討できないかという考えが、意見書の中に書かれています。

北市長

方向性としては今の意見にあった形の中でさらに煮詰められると思います。他にご意見ありますか。

渡邊委員

保護者の立場として、小学校を卒業して中学校に入学するとすぐに高校受験をどうしますかというお話が学校の先生から言われます。将来の方向性を中1の段階で面談などで聞かれ、今の小学生が令和7年度に高校受験に関わってきますので、早い段階で情報提供していただきたい。緑峰高校で長年続いているカレンジャー娘だったり、富良野高校の演劇的手法を使ったコミュニケーション授業などの良いところを残していただきたいと感じています。

北市長

今の部分のご意見としてよろしいですか。

近内教育長

昨年要望書を提出し、その後の道教委のスケジュールを確認してしまして、渡邊委員が言ったとおり、高校の再編が仮に令和7年度だとすると、その3年前の入学者が遅くとも中1になるまでにはある程度の形を道教委としても出すべきであるという考え方がありまして、可能な限りこういった高校が必要という地域からの声を早ければ早いほど道教委としても検討できるとのことでした。地域の小学校6年生あるいは中1で入学してすぐの時期にわかるような形でスケジュールを教えてくださいました。

北市長

よろしいですか。他にご意見ありますか。

津山委員

高校の再編について異論はございません。宮本委員が言ったとおり、旭川方面に行く子どもたちを地元の高校に入学させるかに尽きると思います。何を求めているかという、有名公立大学・私立大学の進学実績だと思います。そういう意味では東大に入学できれば、旭川東高に行っている学生が富良野高校に来て旭川に流失する子どもたちがなくなると思います。この特進のクラスは1年生の時から徹底して東大生をめざすような子どもたちを育てていける環境やスタッフをそろえていただきたい。勉強だけではなく部活動でも選択することもあるので、甲子園に行くとか全国レベルのクラブ活動にも目を向けてほしいです。自分の母校ですので将来的にずっと残ってもらいたいです。

北市長

ありがとうございます。他にご意見、ご質問ございませんか。

菅野委員

検討経過について、6回会議を行ったということで、宮本委員も関わっていた部分で、高校生に求められる資質能力とか、高校生に求められる教育活動という部分で、どういった意見が出たのかをお聞きしたいです。

宮本委員

これからの社会はAIの社会となって、もう1つは格差社会がおとずれ、オートマチックのように格差社会が進み広がっていく。そういう時代を迎える子どもたちにどういう力を付けたらいいのかということを中心に話されました。主体的に人生を切り拓く力を育むこと、グローバル社会で活躍する人材を育成する学校であるとか、富良野圏域の富良野を中心としたまちの創生を担う未来の地域産業を支える学ぶ意欲と社会性を身に付ける人材を育てるということで論議されました。その中で細かいことが出てきましたが、大きなところでは先程話したように来年、再来年どうするかではなく、20年先の社会や富良野がどうなっているのかを見据えながら、今考えられる限りのそれぞれの知見を引き出しながら作り上げました。その中でコミュニケーション能力は必要ということも出てきましたし、コミュニケーション能力がなぜ必要かという、友だち100人できれば良いというのがコミュニケーション能力の本質ではなく、格差社会の中で自分が困った時に、本人の責任ではなく色々な人とネットワークを持ちながらコミュニケーションをとりながら、自分のことを説明し、人の意見も聞いてそこから脱出していくかが、コミュニケーション能力であるということも話されました。

菅野委員

先程から東京大学が特進クラスの目標と扇山小学校の子どもたちも思っていることに驚いていますが、東京大学だけが良い学校であると自分は思っていないので、特に進んだ学校で何をするかが、何を目的に大学に入学して、その後が大事だと思っています。あとは、日本全国でも高齢化が進み、人口が減って富良野市からも人口が減って、その対策を行っていないことに批判が出ますが、それを防ぎきれものではなく、受け入れることは受け入れて、その先にどういったものを個人個人で描き取り組むかが重要で、想像力を働かし解決していく能力を若者が育って

いって欲しいし、議論する場に高校生も入り、中立や色々な意見もありますが、日々中立で生きている人は少ないので、色々な意見で左右されながら議論することが大事なので、18歳までにはいっぱい議論をして、社会人や教育委員会などでも話し合いを行い、多様な意見を高校の場でも持っていただきたいと思っています。

北市長

意見交換として行っていききたいと思います。

宮本委員

東大というのは進学の特徴みたいなもので、北大をめざす学校ではなく東大をめざす学校が重要で、日本一の学校をめざすことだと思います。大変なことでありますが、それは実現できることだと思います。東大だけめざせばいいのかというと菅野委員が言うようにひとつの仮定であって、地域といろいろな体験をしながら地域がどうあるべきかを考える、一時期のキャリア教育と言っていましたがそのことも踏まえながら、高校生が自分たちの青春時代を津山委員が言った部活動の充実も含めた輝かしい3年間を過ごして欲しい願いが込められていると思います。

北市長

たまたま学校の名前が出ましたが、東大がいいか北大が良いかという話になりましたが、突き詰めて考えた時に、優先されているのが進学優先の特進という教育が受けられる環境が、その環境が東大をめざす学生もいれば、水産学校をめざす学生もいると思いますが、それぞれの思いの一番の学校をめざすことができる教育環境を新しく設置される学校の魅力としていくことと思います。教育長何かご意見があればお願いします。

近内教育長

まさにそのとおりだと思います。学校再編となれば再編とはイメージがよろしくないなので、まったく新しい学校づくりをしていく中で色々な個々の生徒の夢が叶えられる学校として、東大もあり水産学校もあり農業大学校もあるということを高校の3年間でしっかり考えて進路選択できるような学校づくりを行い、先生方の教育環境も必要で、できるだけ多くの生徒が集まる環境も必要となります。冒頭北市長も話されました、樹海小・中学校の閉校ですが、新しい新設校として樹海学校ができ、重なるものが高校再編の意見の中に書かれていると考えています。

北市長

ありがとうございます。再編される学校の魅力ということと、管外に流出している状況をどのように解消していったら良いのかのご意見があればお願いします。

高校の魅力をつくるということは流出を止めるということにはなりますが、魅力をつくただけでは叶わないので、渡邊委員が言っていたように小中学校に対しどんな学校がつけられるかを時間をかけて伝えていくことが大事だと思います。勉強だけではなく、実態を聞くと中学校で野球をやっていた子が他の学校へ行くということが顕著に出ています。話題になったのが中学校で一生懸命バスケットを行っていたが、富良野高校で残っているのが1人だけだという話も聞きます。

スポーツの関係でも他の学校に出てしまっている中で過去の取組では、中学校の野球部がみんなで富良野高校へ行きがんばるということも聞きました。子どもたちの意識づけも必要ではないかと思います。いかがですか。

津山委員

部活動は大事で、流出する子どもたちを止めるには、入ってくる子どもたちに富良野高校では野球部が甲子園にいつも出場できるということになれば、他の地域から富良野高校の野球部に希望することが増えると思います。少林寺拳法が全国トップクラスで、少林寺に入った子どもたちが青山学院大学とか明治大学とかに推薦で入学できることから人気のある部活です。青木先生が他から学生を連れて来れないかということで、自宅を改造して合宿所みたくやりつつあります。そういったことも考える必要があるとも思います。

北市長

部活の話も出ました、他に何でも良いので何かありますか。

津山委員

昔スキー部が富良野高校では有名でした。

渡邊委員

吹奏楽を続けたいという子も旭川に行っています。娘が中学3年生ですが、パティシエをめざすので三笠の学校に行きたいということもあります。

北市長

部活で他の学校に行くということは、子どもたちの気持ちとして何を優先にしているのでしょうか。

菅野委員

先程北市長が言ったバスケットは、旭川ではレベルが高い意識があると思います。自分もバスケットをやっていましたし、昔から社会人のチームも全道的に1位、2位を争うような団体もあります。バトミントンもレベルが高い意識ということがあると思います。富良野で勝ち進んでも旭川では1回戦で負けるという旭川のレベルの高さの違いがあります。将来ずっと続けるのであればレベルの高い旭川をめざすという流れだと思います。先程の吹奏楽もそうだと思います。旭川では全国的にもレベルが高い商業高校などもありますので、そこで指導を受けたいという希望もあると思います。スポーツであれば高校だけではなく寮みたいなものも充実させないと、富良野をめざして来ても受け入れ体制がないと問題があると思います。

津山委員

強烈な指導が必要です。それにつきます。

北市長

少林寺の関係では富良野で育った子どもたちで、他の地域で育たないと優秀な成績が収められないということではなく、富良野でも優秀な成績がある運動能力をもった子どもたちがいるけれども、指導者となると学校の先生も一番の先生を呼ばないとだめとなりますね。教育長どうですか。

近内教育長	<p>今までの富良野高校で全国大会や全道大会での色々な活動や緑峰高校でもそうですが、優秀な指導者を確保することは、大学との連携と同じく、より意識の高いレベルで活動ができる環境づくりが必要だと思います。</p>
宮本委員	<p>かつて部活に関わっていた者として、思うのは指導者とお金とスポーツなら選手の才能や能力の3つだと思います。いつも願ってはいけないうまくいかないのが、先程格差社会が来ると言いましたが、自分たちが何を説明し、目標を定め中学校や地域全体に説明して、自分たちのことをわかってもらい、地域の要望も聞き、コミュニケーション能力を発揮していくしかないと思います。地道ですが一番の手がかかりだと思います。スモールステップでいいので実績を積むのがこれから求められることだと思います。</p>
北市長	<p>魅力づくりについては、今まとめていただいたと思います。他に再編にあたってお気づきの点があればお願いします。</p>
宮本委員	<p>小・中・高、専門学校があり、大学は簡単にはいかないですが、通信制の大学が富良野に開校したいとか、通信制ではなくサテライトなどのゼミ単位で富良野に訪れている学校があるので、もっと構築していければ良いと思います。富良野に足りないのは、特別支援学校に対する教育的支援ニーズがかなり高いと思われ、旭川もあり上川北部でもあり空知にもあり、十勝の新得にもありますが、上川南部には特別支援学校がないということで、上川南部のニーズに応えるには、富良野に特別支援学校を誘致すべきと考えます。まちのブランドも向上すると思います。</p>
北市長	<p>大学とか高校以上の高等教育についても言及頂きましたが、特別支援学校について高校の再編だけではなく、それに関わったより充実した教育環境整備として特別支援学校ということでいかがですか。現況を説明してください。</p>
亀淵教育部長	<p>資料2の上川南部における特別支援学級の学級数・児童生徒数にて説明します。小学校と中学校の平成22年度と令和2年度の10年間比較を掲載しています。特別支援学級の中の知的、肢体、弱視など分類がありますが、特に10年間で増えてきているのが、知的で小学校では学級数が14から25、児童数が38から83人と2.2倍に増えています。また、自閉症が学級数13から23、児童数が32から103人と3.2倍に、中学校におきましても同様に知的で1.8倍と自閉症が2.7倍とこの10年間で2倍程度になっています。裏面では富良野市だけではなく上川南部全体の推移ということで、平成22年度と令和2年度の小学校と中学校を比較しています。在籍率では小学校で3.1倍、中学校で2.5倍と増えている実態となっています。以上です。</p>
北市長	<p>今の少子化の傾向で子どもたちは減っていますが、特別支援を要する子どもたちは増えているという実態です。この関係について教育長から補足説明がありま</p>

す。

近内教育長

この関係につきましては、本市でも特別支援教育マスタープランを策定し、直近のマスタープラン作成時のパブリックコメントでも保護者からできればこの圏域の中で特別支援学校の設置を求める声がありました。その後の教育振興基本計画策定時のパブリックコメントでも同様のご意見を頂いております。市内の中卒者の進学状況からは、毎年5～6名が上川管内や空知管内の特別支援学校に進学しています。富良野沿線全体では10名前後が進学しています。また、現場の意見としてもし上川南部に特別支援学校があったら通学させたいニーズもあり、経済的に見ても少なからずいることを中学校から聞いています。

北市長

現況について、教育長からも情報頂きましたけれども、特別支援学校についてご意見いただきたいと思います。

近内教育長

さらに北海道が平成30年に策定している5ヶ年計画ですが、特別支援教育に関する基本方針では特別支援学校の配置については、可能なかぎり通学できる身近な場所で受け入れ体制を整備できることに努めると記載されています。まさに上川南部は特別支援学校がないため、今後誘致・立地に向けて道教委に対して要望していくことが必要だと考えています。

宮本委員

スケジュール的に高校の再編の要望とできれば併せて特別支援学校設置の要望書を提出するのが理想的だと思います。多少前後してもあまり差がでない時期に要望書を提出する方が良いと思います。体制についても管内や旭川との関係もあるためです。

近内教育長

設置にあたっては道教委の基本方針の中で、高校や小中学校が統廃合により使用されない既存施設の活用を基本とすると記載されています。そういった施設があれば立地・誘致に関してきっかけになると思っています。宮本委員が言われた部分もうまくタイミングが合い可能性があると思います。

北市長

今の既存施設の活用をというとなら2校が1校になるので、再編に併せて特別支援学校の同時進行で導入して要望すべきではないかという意見ですがいかがですか。

菅野委員

今のタイミングで要望していくことが理想だと思います。支援を要する子どもが今後増えていく予想のため。

近内教育長

この資料でも情緒の子どもたちが急激に増えていて、何が原因かが特定できていなくて色々な理由があり、事実として増えていることで、そういった子どもたちの多様な能力を伸ばしていく必要があるため、特別支援学校が必要だと思います。

北市長

上川南部ということであれば沿線で特別支援学校に対するニーズがどの程度あるのかということも調査する必要があり、現況の富良野でも6～7名が管内の特別支援学校に進学しているので、今の小中学校での傾向を含めて特別支援学級の教育環境を整えていくことが重要であると思います。なかなか原因がわからないということですが、家庭内でも気づくきっかけや気づいたことで早期に改善に向けての対応できるきっかけにもなると思います。学校だけではなく富良野市全体の子どもたちの改善に向けた取り組みの影響力にもなるものと考えます。特別支援学級の関係についていかがですか。

菅野委員

富良野市の特別支援マスタープランは素晴らしいものなので、もし特別支援学校が設置されるとなれば、保護者にとっても安心度が増すものと思っています。

北市長

方向性についてはおおむね賛同いただきましたので富良野市内高等教育在り方検討会議の意見も踏まえながら、沿線市町村と連携を図りながら今後北海道教育委員会教育長宛の要望書を特別支援学校も含めて提出していくことで確認をさせていただきます。

それでは全体として市内の高等教育環境について、ご意見などありますか。

よろしいですか。

次にその他に入りますが、その他についてはこちらからの情報提供で事務局より説明いただけますか。

亀淵教育部長

カラーの資料について、説明いたします。不登校児童生徒の運動習慣の重要性について、折れ線グラフが記載されている資料で、不登校の要因としましては、小学生、中学生におきましても無気力であったり、不安という部分が4割以上のウェイトがあり、一方で生活リズムの乱れも大きく起因するものとなっています。生活リズムの乱れでは、睡眠不足や昼夜逆転による夜型の生活、不規則な食生活そして運動不足となり自律神経の悪化というものにつながります。その中で体力の向上のため運動習慣の確立をするために、運動療法ということで生活のリズムを整えるために運動と食というのも大事になります。日常の生活の中に有酸素運動を積極的に取り入れることで、血液の巡りがよくなり心拍数にも表れてきます。そうした改善がみられるということです。有酸素運動が増えることにより心拍数も上がり、循環器系の機能がよくなります。それに伴い心の変化にもつながっていくということです。ネガティブな気分からポジティブな気分が変わっていくことが現れます。特に起立性障害といわれる子どもたちにつきましては、昼夜逆転し運動をしないということで、家にいる時間が長くなりなかなか体が動かないという状況になってくるということです。運動療法や運動することを取り入れることで体と気持ちの改善につなげることができるとされています。裏側の資料では、運動することによってのプラス面では、体力と学力の関係では体力テストの良い子どもは学力の面でもプラスになるという相関関係が見られます。次に1日に歩く歩数と色々

な習慣病の予防にどのような効果があるかということで、毎日の歩く歩数が多い人ほどうつ病や認知症、がん、高血圧、糖尿病などの予防効果があるということです。スポーツの頻度と日常生活における充実感という部分につきましては、1週間の内でスポーツをした頻度が高い人ほど日々の生活の充実度があるという結果になっています。ストレスと運動回数との関係ですが、仕事のストレスや抑うつ割合ですが、こちらも同様に運動回数が多い人ほどストレスも少なくうつ傾向も低くなる傾向がみられます。不登校児童生徒はもちろんです、私たち大人にとっても適度な運動が精神や健康のためにも必要であるということです。運動療法や運動を不登校児童生徒にも取り入れ生活リズムを改善していくことが不登校の改善にもつながるのではないかと資料です。以上です。

北市長

実は健康都市首長会議というのが全国規模で開かれスマートウェルネスシティ首長研究会の資料ですが、健康のテーマで講演をいただきその中で運動と子どもたちの不登校という部分にも触れてお話がありました。以前東山の学校に訪問した時も東山でも不登校児童生徒がいて、田舎ののびのびしているところで不登校はないと思っていましたが、そうではなくどこにでもあり、そういった要素が含まれるということから、改善に向けた気持ちもあって首長会議の中で話がありましたので、内容や効果など十分に説明できないため、こういった観点を持ちながら教育環境をつくっていくことができないかと情報提供しました。何かご意見ありますか。

宮本委員

教育の目的は人格の完成にあります。人格の完成のためには確かな学力であるとか、豊かな心であるとか、健やかな体のいわゆる知・徳・体の3要素と言われています。我々はすぐに確かな学力に目を向け、次に豊かな心に目が向き、健やかな体の方には気がいきづらいます。2つに比べるとあまり重要視されていません。これは、すごく大事な指摘だと思います。健康都市の推進のためにどこかでスローガンを掲げて、それを学校の中に落とし込んでいき、実践していくことが目立たない取り組みですが、不登校を減らす取り組みとなると思います。前にも話しましたが、農業高校では不登校生徒がいないし、中学校時代に不登校であっても農業高校に入学すると皆勤賞で卒業するという事例がありました。体力づくりとちょっと違いますが、土に戯れたり重いものを運んだりとかして汗をかくことがあるため、農業高校で不登校の率が少なく、出現率は他の学校と比べても相当少ないです。この指摘は大事で、推進していくことが重要だと思います。

北市長

他にいかがですか。

菅野委員

農業高校で不登校が少ないということは興味のある話で、自分の小さい頃も秋には援農という芋ひろいなどを学校で行っていました。すごく楽しく新鮮でした。農業のまち富良野として農業と教育の健康維持というのがどこかでつなげられるのではないかと思います。自分も知育や徳育より体育が一番大事でどんな志があ

っても健康を損なうと達成できなくなります。子どもたちの健康を守っていくことが非常に大事だと思っています。

北市長

ありがとうございます。他にいかがですか。

津山委員

文武両道で毎日剣道をやっている昨年で、精神的につらくなりました。徹底的に歩いて素振りをする毎日でした。コロナが落ち着き1人小学生の不登校児童がいて、自分の毎日の運動習慣にしても運動することが大事だと思いました。良いテーマで情報を頂きました。大人のみなさんも実践できるように進めていきたいです。

渡邊委員

実は私の子が2年ほど学校に行っていない不登校ですが、本人に聞いても何が原因で学校に行けなくなったのかわからない。そういう子をどうやって運動させようかという、親として実際問題としてすばらしい意見だとは思いますが、毎朝起こすのも大変で、規則正しい生活を送らせるのも大変という時に、運動が大事と言われても行動に移せるかが疑問です。

北市長

そうですね、運動を学校と関わりをもちながらというと、学校に行けないものと同じ動機で行動にはつながらないかもしれませんが、違う環境で運動できる取り組みをする。スポーツ少年団などを不登校環境にある子どもたちの場づくりみたいなものをつくり、同じ悩みを持つ子どもたちが学校ではないオープンな所に来ていただき、生活習慣や学校に行くための準備みたいなものが心の中に育てていただければと思います。

渡邊委員

週に1度適応指導教室に通っているので、適応指導教室の先生と話をするだけでなく、軽スポーツなどが出来ればという希望はあります。

北市長

方法については色々あると思いますので、ケースに合わせて機会をつくっていくことが問題解決の一步にもなると思います。他にありますか。その他の案件でも何かありますか。

全体として教育長から何かありますか。

近内教育長

今の不登校の関係は、子どもたちが最終的に社会参加出来るかを最終目標にしていくと、それまでの歩みというのは早い人もいれば遅い人もいます。やり方というのは東大一直線もあれば、かなり緩い道をたどりながら目的に向かうということで、私たち大人が子どもの特性をしっかりと見ながら、向き合いながら子どもたちそれぞれが安心して学べるような、生きて行けるような学びの多様性という環境づくりが必要だと思います。渡邊委員の話の中でも保護者も悩んでいますので、保護者に対するケアを含めて一緒に考えて行ける取り組みを行政だけでは難しいので、民間と連携して行きたいです。フリースクールという話もありますが、可能

な限り情報共有し進めて行けるような環境が富良野で実現できれば良いと思っています。

北市長

教育長にまとめていただきましたが、他になければ終わりたいと思います。

本日の総合教育会議の中で高校再編に向けた情報共有をさせて頂きました。特別支援学校の重要性についても確認いただき、この後要請に向けて努めてまいりたいと思います。最後に不登校の関係についても話題提供にしかありませんでしたが、1つのきっかけにしてこの後ご尽力いただければと思います。あと10日ほどで新しい年が来ます。コロナで明け暮れた1年でありましたが、少し落ち着いていますので、この後3回目のワクチン接種ということで徹底した感染防止対策の話題にもなっています。そういったことも含め新年は明るい、次の希望を見出せる1年になれと願っています。委員のみなさまにおかれましては、健康に十分留意され明るい新年を迎えますことをご祈念させていただき終わりの挨拶にさせていただきます。本日は大変ありがとうございました。

亀淵教育部長

以上を持ちまして、令和3年度第2回富良野市総合教育会議を終了いたします。

閉会 午後2時43分